地域と連携した「高校の魅力化」フォーラム
地域がフィールド、地域で学ぶ『行学』　～実践しながら生きる力をつけていく～
岡山県立津山東高等学校

１．はじめに

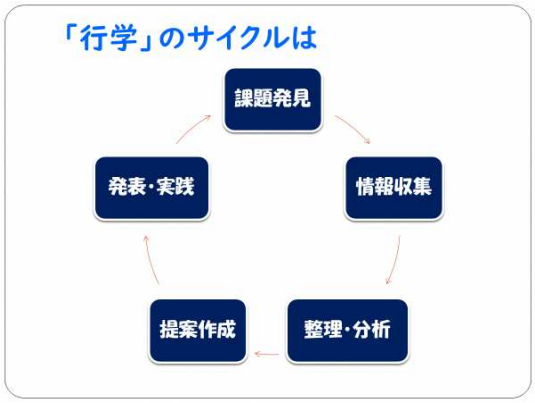
本校は平成 21 年度から地域での社会貢献活動に積極的に取り組み、平成 23、24 年度は総合的な学習の時間の推進校として探究学習に力を入れてきた。だが、地域連携が活発になり、有志による地域での実践が増加していく中で、これをカリキュラムに取り入れ、全員が体験できるようにするため、総合的な学習の時間の再編をした。平成 27 年度に委員会を立ち上げ、平成 28 年度から総合的な学習の時間を校是「行学一如」をモチーフに「行学」と命名し、地域で学ぶ課題発見解決型の探究学習に変更した。年次進行で進めていき、令和元年度が完成年度となる。毎年ブラッシュアップ、マイナーチェンジして現在に至る。

校内で完結する学習ではなく、地域に出向きフィールドワークを行い、高校生目線で地域の良さと課題を発見し、解決に向けて提案、実践することで世の中の課題をジブンゴトとして捉えることができるようになる。提案に留まれば他人事で終わってしまうため、何らかのカタチで実践し、社会との接点を持つことを意識している。地域に出向くことで社会規範や多様性に触れることができ、将来を考える上でも課題意識をもって、進路選択をすることができるようになる。

２．つけたい力

経済産業省が提唱している、職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力「社会的基礎力」は、３つの能力「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」と定めており、その中には、「主体性」、「実行力」、「課題発見力」、「創造性」などの 12 の能力要素から構成されている。

本校の「行学」において生徒につけたい力
- コミュニケーション力
- 深く考える力
- 様々な視点から考える力
- 協働する力
- 実践する力
- 課題発見解決力（修正→再提案も含む）
- 論理的に考える力
- 発信する力（プレゼン力）
- 変化に対応する力



このサイクルを繰り返すことで様々な力をつけることができる。
それぞれの学年の達成目標を考え、３年間のカリキュラムを構築していった。

３．３年間のカリキュラム

１年次
- 身近なテーマで課題解決型学習の流れを体験する。
  その際、話し合いのスキルや情報収集の手法も身につける。
- 探究的に課題に取り組む手順や思考過程を学び，協働的に課題を解決する。
- 自分の考えを伝える力（プレゼン力）を身につける。

２年次
- 校外（地域・社会）に目を向け，批判的・協働的・創造的に思考しながら課題発見・解決に向けた提案、実践をする。
- これまでの経験をもとに社会に目を向け，自己の意見をもち、人に伝えることができる。

３年次
- 多角的なモノの見方、価値観に触れながら、自分の進路実現を目指す。

４．具体的なプロジェクト内容

平成 28 年度～

１年次

〇学問・職業プロジェクト

ランダムに分けられた４人組で割り当てられた学問分野を調査しまとめ発表する。

〇委員会プロジェクト

ランダムに分けられた４人組で学校内の身近な課題について解決策を提案、発表する。

〇発信力プロジェクト

個々に興味ある内容についてパワーポイントを利用し、プレゼンを行う。
情報科目と連携して実施する。

２年次

〇地域活用プロジェクト

公民館単位でフィールドワークし、課題発見解決の提案を行う。
津山市と連携して、地元企業動画制作を行う。

〇社会世の中プロジェクト

個々に興味ある内容について探究し、論文を作成する。

３年次

〇総合探究プロジェクト

興味ある分野に分かれ、グループディスカッションやディベートを通し、考えを深め、論文を作成する。筋道を立てて考えをまとめることができるようなる。

平成 31 年度（令和元年度）～

１年次

〇まなびプロジェクト

ランダムに分けられた４人組で割り当てられた学問分野を調査しまとめ発表する。

〇SIM 津山プロジェクト

６人１グループで津山市の事業について考え、その優先順位をつけていく。
また、根拠を持って順位の理由を説明する。

〇発信力プロジェクト

SIM 津山の学びを受けて、新規事業提案を行う。パワーポイントを利用し、プレゼンを行う。
情報科目と連携して実施する。

２年次

〇地域プロジェクト

８つの興味ある分野に分かれて、フィールドワークをもとに課題発見解決に向けて提案、実践を行う。この活動を通して多くのチカラを身につけ、世の中の課題をジブンゴトとして捉えるようになる。

〇社会世の中プロジェクト

地域プロジェクトで取り組んだ内容を SDGs の観点で捉え、社会的意義を見いだし、内容を更に深めて活動報告をもとに論文を作成する。また、興味ある 17 の目標の観点で意見交換し、地域課題に留まらず、視野を広げ、社会的課題について考察する。

３年次

〇総合探究プロジェクト

興味ある分野に分かれ、グループディスカッションやディベートを通し、考えを深め、論文を作成をする。筋道を立てて考えをまとめることができるようなる。

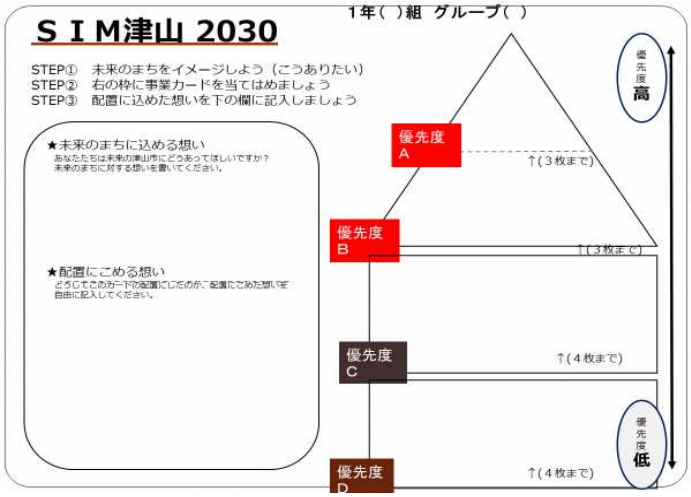
〇行学以外でも１年生で「だっぴ」を実施し、様々な地域の大人とフラットな場で話す機会がある。

５．特徴的な取り組み

①SIM 津山プロジェクト（事業仕分けシミュレーション）

プロジェクトの目標は生徒が次のことができるようになること

・地域のことを知る
・根拠を持って考え説明することができる
・複数の視点で考えるができる
・協働することができる



６人１グループで津山市の事業について考え、事業の優先順位をつけていく。どんな街にしたいかにより、優先順位が異なり、様々であるがそれを他のグループに説明する。その際根拠を持って順位の理由を説明できるようにする。
６人がそれぞれの部署の部長としてまちづくりを考える。

・産業農林部・子ども保健部・環境福祉部・地域振興部・都市建設部・教育文化部

発表には、市役所の方に来ていただき、意見交換を行う。
このプロジェクトにより、地域を身近に感じ、これまで通り過ぎるだけだった街を違う視点で見ることができ、まちづくりに対して、参画意識も芽生えていくようである。

＜実施までの経緯＞
平成 30 年２月、島根県雲南市の高校を視察し、「SIM うんなん」の取り組みを本校にも取り入れた。事業内容は実際に津山市が行っている多くの事業の中から、高校生でもわかりやすいものにしたいと考え、教員と市役所職員で選定し、22 の事業に絞り込み、カードを作成、デザインは生徒が行った。

②企業動画制作

平成 28 年度から津山市役所移住定住推進室との協働事業として実施している。今年で５年目となる。初年度は放課後を利用して、有志で行っていたが、次年度から行学の一分野として授業に組み込む。高校生に地元企業について知ってもらいたい津山市と高校生の力を地域に知ってもらいたい高校の意見が一致し、実現した。２人１組で企業を取材し、１時間から２時間のインタビューの文字起こしと 100 枚を超える写真から言葉と写真を選定し、社長および社員の思い、企業理念など高校生が伝えたい内容を２分の動画にする。毎年、企業からは「こんな風に表現してもらえて感動した」「社長の笑顔を始めて見た」「改めて社長の想いを聞いていい会社だと思った」などの声が寄せられる。高校生は「津山にこんな素晴らしい企業があることを知らなかった」「私もこの会社で働いてみたい」など地域理解の機会となっている。
津山市ポータルサイト「LIFE 津山」で視聴可能
https://life-tsuyama.jp/movie_theater/movie_03_year2019.html

③地域プロジェクト

５月に全員がフィールドワークに出かけ、課題や魅力を見つけ課題解決あるいは魅力発信をしていく。当初は地域ごとに課題発見解決に向けて取り組んだが、どこも少子高齢化で同じような内容になることから、観点ごとに分かれて課題発見解決に向けて提案、実践するように変更した。

８つの分野については、教員と地域コーディネーターで話し合い決定した。

「医療」「福祉」「環境防災」「教育」「産業」「観光」「空き〇〇」「企業動画」

すべてのグループ（48 グループ）が発表（ポスター発表、ステージ発表）することでプレゼン力も養う。有識者、市役所職員、フィールドワーク先や地域の方に来ていただき、意見交換を行う。授業としてのプロジェクトが終了しても継続的に活動を行うグループもある。

＜昨年の各分野代表＞

①観光	「津山で国際交流 WFF」
②福祉	「知和を盛り上げよう」
③子ども	「保育園で生き物を飼おう」
④産業	「地域活性化と寄付」
⑤環境防災	「すべての人が安全に避難できるように」
⑥医療	「薬草染物＆料理」
⑦空き〇〇	「上山活性化～空き〇〇でのイベント実施～」

◎地域プロジェクトの効果　～自走する高校生の増加～

①福祉グループ**「ちわを盛り上げよう！」**は継続的に活動に参加し、子どもと高齢者の交流がないことに気づき、イベントを計画。地域の方の協力を得て開催することができ、子どもと保護者、高齢者の交流が生まれた。高校生が繋ぎ役となり、地域の新しい交流のきっかけとなった。

☆岡山県高校生ボランティアアワード　入賞

②行学の医療分野で探究したことをきっかけに助産師を目指す生徒が今の自分でもできることはないかと一人で奮闘。
様々な機関に足を運び考察、自ら妊婦のためのレシピも考案。その思いを１月 13 日に開催されたマイプロジェクトアワード２０１９に出場し語った。
中四国サミットにて代表となり全国大会出場となった。
3 月に中四国代表としてオンラインで出場
「未来の医療と食べることの素晴らしさ
～高校生の私でも健康にできることがあるんじゃけん！～」

毎年、それぞれ３～４人のグループで自分たちが感じた課題について調査し、解決策を提案、実践を繰り返している。インターネットでの調査とフィールドワークでの現地調査では結果が大きく異なることが多く、今年はフィールドワーク後、方向性を変えたグループが目立った。ただ、コロナ禍においても自分たちでできることを考え、行動している生徒が目立つ。昨年は地域プロジェクトが一区切りついても継続的に活動する生徒が多く、ジブンゴトとして捉えることができ、進路決定に結びついた生徒も多い。「行学」はあくまでもきっかけで自走する生徒を増やすことが理想である。

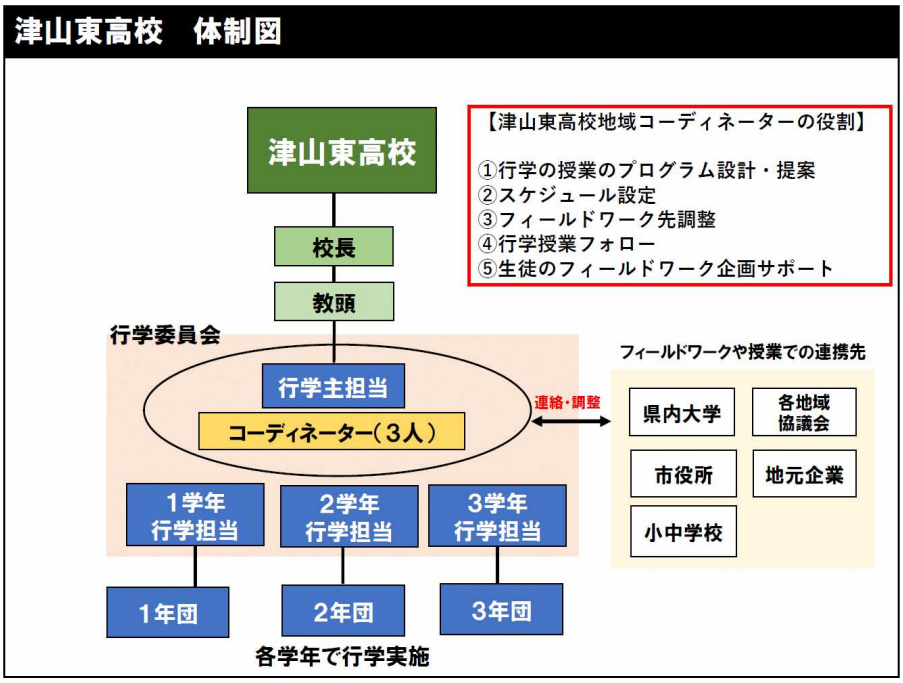
今年度はコロナの影響で１学期にフィールドワークに出向くことができず、インターネットやRESAS を活用した調査を中心に行い、地元の方を招聘して少人数での聞き取り調査、オンラインでのインタビュー等を行った。全員でのフィールドワークは９月に実施。

①「城東地区の魅力発掘と発信」　デジカメ、タブレットで調査
　和田優輝さんと和田建築事務所
　空き家改装・古民家カフェ等再開発・・
②「観光資源発掘と商店街の面白い店めぐり」　椿高下～商店街
　ちんがらや（着物）　村上拓磨さん
　文化ストア、Ziba プラットフォーム、臼井茶舗、カウェウーゾ
　地蔵院、武家屋敷群（観光資源が壊滅している）　肉ハサミバーガーなど
　インセクト　武川さん　　川戸さん
③「津山の危機管理について知ろう」
　津山市役所危機管理室　　９名まで
④「こどもプレーパークを実現しよう」
　「たかくらプレーパーク」復活に向けて　　高倉地区本多さん・下山さん
　空き地を利用してこどもが自分たちで遊べる場所に！
⑤「こども食堂ってどうなってるんだろう」
　「ごはんやふまる」店主が対応　　８名まで
⑥「こけないからだ体操」を一緒に　気になることをいろいろ聞いてみよう！
　一宮公民館　　津山市役所　石田さん　８名程度

生徒の希望を取り入れると同時に違う視点でも考えてもらえるよう８月から計画。
９月に実施できたのは地域コーディネーターがいたからである。

６．地域コーディネーターの導入

持続可能な活動にするために、平成 31 年度（令和元年度）からおかやま子ども応援事業を利用して、地域コーディネーターを導入している。校内組織だけでは、学年の特色に左右されたり、人事異動があったりして、すべての学年でプログラムの目的を達成することが難しい場合がある。また、地域との連携も他の業務をこなしながら連絡や調整していく事にも限界があり、担当者のマンパワーに頼るところが大きかった。そこで定点観測し、３年間を見通してプログラムを遂行していく人材が必要であると考え、校内の担当者と外部の地域に精通したコーディネーターが連携して、地域との連絡調整およびプログラムの内容についても話し合いをしながら進めていくようにした。

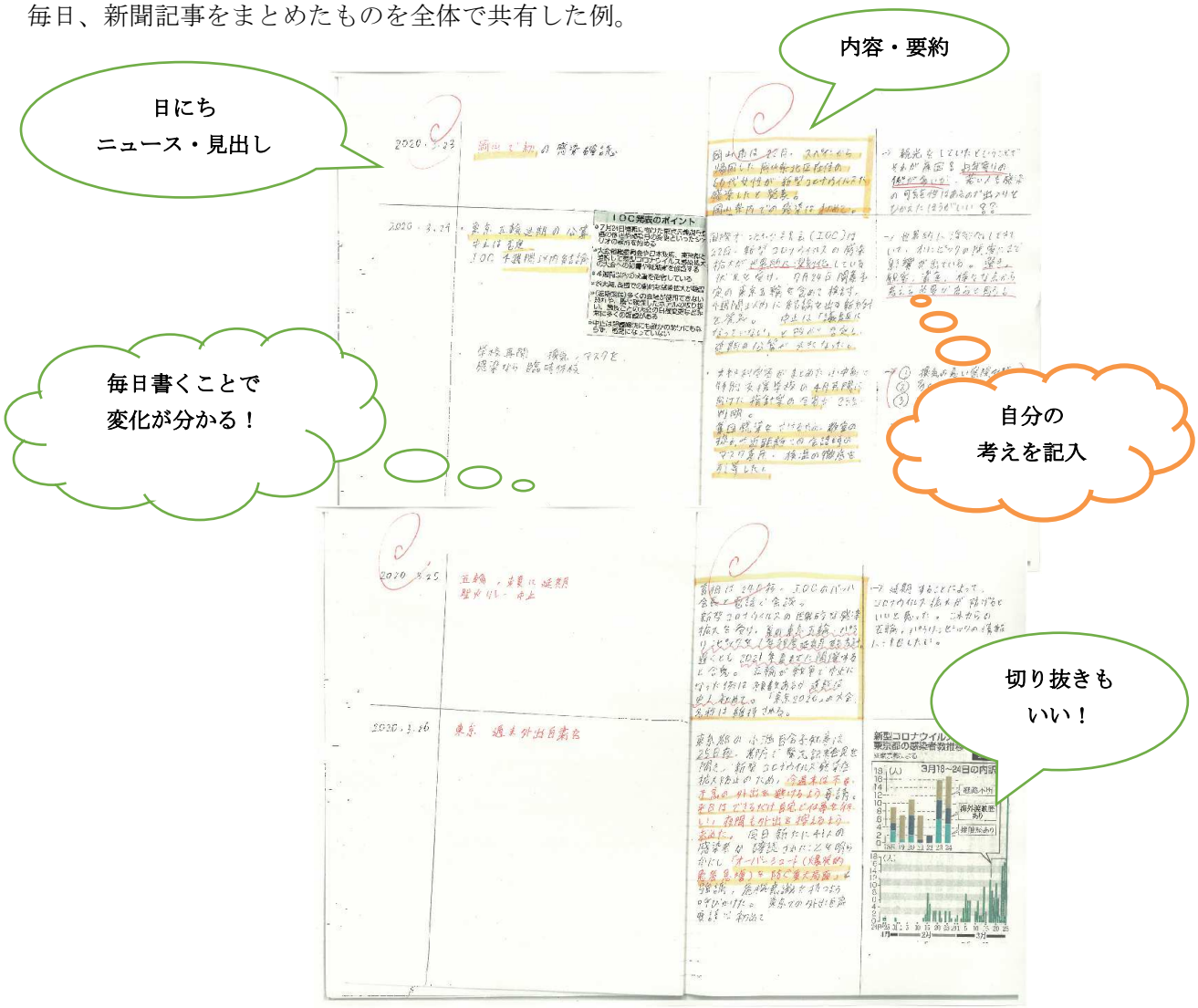


地域コーディネーターの導入により、フィールドワークの幅が広がり、より的確な情報を得ることができる。また、授業にも入ってもらい、生徒企画へのアドバイス・フォロー、外部との日程調整をしてもらえる。

今後は校内連携体制の強化と生徒に求める力や世の中の変化に合わせたプログラムのブラッシュアップが必要である。そして、地域コーディネーターは必須であるが、その財源確保が大きな課題である。

７．コロナ禍での工夫（コロナ探究）

３月から全校生徒にコロナ探究を実施。各自思い思いの探究学習を実践。
毎日、新聞記事をまとめたものを全体で共有した例。



８．最後に

「行学」で学ぶことは「目的」ではなく、あくまでも「手段」そして「きっかけ」である。「行学」を通して、世の中の出来事に関心を持ち、地域に対して働きかけ、自分が動けば世の中が少しは変わることを実感してほしいと思う。自分の実践がうまくいくことより、何か変えようと挑戦することの方が大切である。挑戦に失敗はつきもので、次はどうすればいいか考えていく中で生きる力が育まれていく。一人ではできなかったことが仲間を増やすことで可能になり、外部に頼ることで実践でき、うまくいかなかったことから多くを学んでいく。その過程で生き抜くために必要な力が身につく。そして、「行学」を通して知らなかった自分に出会い、人生の可能性が広がる。そんな生徒が増えていくためのプログラムを提供するために、生徒だけでなく、教員同士も振り返りを大切にし、改善を続けていきたいと考える。教員もその場をうまく収めることより、つけたい力を育成することを優先し、生徒の失敗を歓迎してもらいたい。いかに生徒のやる気に火をつけるかがこの「行学」を中心とする活動のすべてである。自走を始めた生徒に伴走していく教員の姿がこれからの理想である。また、教員に限らず、地域の方が伴走してくださる例もある。

そして、生徒の実践を可能にするためには、地域の協力は不可欠である。高校生が挑戦できる、あるいは失敗できる土壌づくりを学校と地域が協力して行っていくことで地域を担う人材育成にも繋がる。地域が受け入れてくれ、地域の大人も変わっていくことで高校生は地域での活動を通して学び、生きる力を育みながら、地域に愛着が生まれるのだと思う。